

春燈



安住 敦の句

秋風のが身ひとつの句なりけり

『古暦』昭和二十六年

終戦後、やっと定職を得て二年目、家族と海水浴に憩う余裕も出て来たが、生きてゆくのは厳しい時代だった。まして、「春燈」の発行責任を引き継いで三年目、何かと辛い苦しい日々…。秋風が身に入む季節は尚更のこと。ただ一つの救いは己を偽らず、万象に向かつて感得した情感を十七音にうたい上げることだった。誰の為でもないこのころの拠りどころだった。

小張 志げ

安住
敦の句

牡丹と在りしこの数日に悔はなし

『午前午後』昭和四十五年

牡丹と言えば、生涯に一四六句も詠んだ俳人は安住敦以外にいないだろう。それほどまでに牡丹を愛慕したところに敦の人間性が滲み出ている。私も毎年庭の牡丹を賞美しているので掲句の心情がよく解る。

また、牡丹に限らず全ての対象を凝視し、沈思黙考する敦の日常身辺の佇まいが見えてくる様だ。まさに「私的抒情」を貫いた稀有の俳人であった。

小泉 貴弘

主宰の句

安立公彦

どの花も同じ気負ひに寒椿

風音の折をりまぎる除夜詣

雀らも元日の色被き飛ぶ

高翔るへりや鳶や初御空

きのふより夕日明るし寒の入



春燈賞（抄）
25句

自選

久本久美子

初神籤のままに失せ物出でにけり

観音の御肩拭ふ春の水

買へさうな伊万里豆皿春きざす

出羽海井筒春日野水温む

子の国は時差十時間鳥雲に

花びらとともに流るる神田川

門楼に立つや緑の京の町

花橘遠くにほへり紫宸殿

神苑にモネの睡蓮目覚めけり

風鈴や折ぎに書かれしおばんざい

律を呼ぶ子規の声とも花糸瓜

六尺に臥して玻璃戸の雲の峰

自画像のもの言ひたげな大暑かな

手足伸べ寝莫座の海に浮かびけり

一灯をイコンに献じ秋涼し

ニコライの鐘は色なき風に乗る

蜻蛉や日比谷の森のレストラン

思ひきり雲が絵をかく秋の天

億年の石門穿つ秋怒濤

鳥渡る伊能図ここに始まると

山寺や千百余段冬紅葉

初しぐれ芭蕉の踏みし四寸道

鳥獣戯画に遊ぶ一日や暮早し

風や陶の狸は立ち通し

山に撞く除夜の鐘の音沖に消ゆ

祖母の地

小倉陶女

「是より北は木曾みち」の春浅し

祖母の地と思へば親し春の泥

堂縁に探す靴べら草萌ゆる

木の匂ひ水の匂ひや木曾路春

青空と色を分かちていぬふぐり

春の炉や地の物多き湯治宿

あたたかや無口な人のそばにゐて

無駄一足も寄り道もよし梅日和

口笛に応へ鶯鳴きにけり

ひこばえや歳月しるき道しるべ

春の雪

荒井 慈

クリスマスカード「ルカ」の二章を引用す
年の果鳩侍らせて靴磨

機嫌よきおてんとさまや去年今年

寒垢離や村の秀才まじりたる

絵硝子の神の小羊春の雪

ひとりでもみんなとゐてもチューリップ

雁風呂や海のにほひの髪を梳く

葱坊主人の話をよく聴けり

しあはせの二乗三乗八重桜

当月集

安立 公彦選



○ 吉川 隆

聖路加病院待降節の白衣かな
聖路加の祈りの小路石路咲けり
十二月花屋の赤のあわただし
片雲や師走を閉ざす旅ごころ
かいつぶり夕日に合点くり返す

○ 都丸美陽子

立砂は神の依代初明り
梅固し釈迦三尊の瞑想す
北條五代の墓に淑氣の満ちにけり
鷹放つ真青な空に昼の月
薄氷や放生の池ねむりをり

○ 久本久美子

煤逃や書肆に椅子ありコーヒーも
年用意父母の墓への日を加ふ
声高き一羽が続ぶる寒鴉
産地の名掲げて葱の白八分
数独に耽る人乗せ冬列車

○ 豊谷青峰

葉牡丹に日の回り来る庭の隅
白蛇の棲む大杉や注連飾
慇懃に襦袢の会釈や恵方道
銃眼に冬木の影の動きけり
寒念仏唱へて橋を渡り来る

○ 河本由紀子

指触るるばかりふたりの火桶かな
極月の時計の針も走りをり
冬木の芽五枚幹にきほひ籠め
捨つる所なき鮫鰯の捨て台詞
病み居れば母が葛湯のむかしかな

春燈の句

安立 公彦選

老いどちの恋の話や初笑

初春や華の軀の道真直ぐ

完結の正念場を生く春隣

苦楽てふ衣纏ひて去年今年

剪定のその先急かす笹子かな

落葉して櫟がまとふ風の音

冬かもめ港の朝を囃しけり

数へ日の人の背を抱く夕日かな

木の葉散るかそけき音を地に鎮め

着ぶくれて降り立つ駅の鳶の笛

手締めの声うしろにきけり酉の市

送り出す背に朝の師走月

海の面に夕日の潤む冬至かな

夕雲の金色しるき冬至かな

親星に添ふる子星やクリスマス

連立ちて海を見に行く三日かな

兵庫 八家こひで

神奈川 葦原 霞切

千葉 吉村さよ子

神奈川 府川 昭子

簗に百家の雀年詰まる

家塾より見据ゑし未来冬木立（慶應義塾発祥の地）

浅野邸跡冬日に照るや十字檜

白息もて運命線をあたためむ

天平の秘仏息づく良弁忌

冬北斗執金剛の彩明かし

署名する芳志瓦や冬の空

冬木立石垣高き女帝陵

戸を叩く風に明日の寒さかな

朝寒や薄きコップの有田焼

風呂敷に残るりんごの匂ひかな

山茶花の刈り整へて花ひとつ

手をつなぎ通る園児や冬うらら

残り香に祖母思ひだすショールかな

記念日の印たしかに初暦

湯たんぽ二つ二人の幸を包みけり

東京 神山 志堂

東京 河崎 國代

愛媛 山内 マヤ

東京 横山さくら



余言

安立公彦

繭ごもりめきて障子のほの明り

浅野 洋子

「繭ごもり」は、蚕が繭にこもること、転じて、娘が深窓にこもること。源氏物語にもこの言葉は出てくる。

そういう背景を一瞬の間、読み手の胸に揺曳させつつ、「障子のほの明り」で、ふと現実の世界に呼び戻されるという巧みな表現の句である。しかも現実に戻りながら、なお「障子のほの明り」は、読み手の胸にゆれ動く影を映すという二重の働きをしている。

作者は安住敦選の晩期から、成瀬櫻桃子選の初期に至る間、しばしば「余言」に登場した。

現実の世界を詠みながら、作品は時に現実をこえた世界を映し出す。その表現の巧みさと、内容の夢幻さは、この作家のみ持つものと言えよう。こういう作品は真似して出

来るものではない。詩性と感性のみことな融合である。

この作家の何年か前の句に、〈引明けの暗さ地を這ふ雪催ひ 洋子〉という句があった。今も晩冬の頃になるとこの句を思い出す。

もとより作者の句は、「繭ごもり」のような世界のみ止まるものでないことは無論である。

片雲や師走を閉ざす旅ごころ

吉川 隆

「片雲」はちぎれ雲。しかし俳人にとってそれはただの雲ではない。『おくのほそ道』の、「片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず。」に到る言葉である。俳人は常にこころの片隅に漂泊の思いを抱いている。

この句はおそらくそういう思いの許に作られたものだろう。それは下五の「旅ごころ」と響き合い、師走を送る作者の心境を遍く伝えている。

立砂は神の依代初明り

都丸美陽子

普段あまり見かけない言葉だ。「立砂」は、儀式の時など、車寄せの前の両側に清めのために円錐形に盛った砂。「依代」は、神霊が招き寄せられて乗り移るもの。と辞書にある。なお「車寄せ」の「車」は「牛車」を指す。

この句はまさに「初明り」という季語の根元をなすものである。元旦の曙光を、敬虔な思いで仰ぐ作者の姿がうか

がえる。

年用意父母の墓への日を加ふ

久本久美子

素直な句だ。何に對して素直か。それは祖霊と慣習に對してと言えよう。育ちや今在る環境によつても異なるが、現代人にはこの素直さが大きく欠落している。

先祖を敬い、慣わしを大事にすることは、生きていることへの感謝の思いに通うもの。作者も同じ思いだろう。

狐火の闇へ携帶着信音

矢口 笑子

「狐火」という、信仰をもとにした口承文学がもたらす幻想的な季語と、現代の社会現象ともなっている携帶電話の取り合わせは、俳句の新しい切口の一つである。

この句で作者が思いを傾けたのは、「闇へ」だろう。この三音の言葉が、「携帶着信音」を「狐火」の領域にとり込んでいる。

幻想と現実が表裏一体となった句であり、季語の持つ情感の良く生かされた句である。

在宅もて見送る覚悟初日記

石田 康明

この句はどう解したらいいのか。鍵は「在宅もて見送る覚悟」だ。ということは、「人の終焉を家で送つて上げたい」という、現代社会の抱える切実な問題を詠んだ句と言えよ

う。それも今さし迫った事態に來ていることは、「初日記」が示している。

重いテーマを持つ句だ。作者はそのことを淡々と表現する。それ故に逆に読み手には重く迫つてくる内容である。

老いどちの恋の話や初笑

八家こひで

まさに俳諧の世界である。同時に季語の持つ広がりと深みの見事な実証の句である。

例えば、西東三鬼の、〈緑陰に三人の老婆わらへりき〉は、対象をシニカルな眼で見ている句だ。しかし「初笑」の句は明るい。

老婆たち（「高齢の女性たち」では、大地に腰を据えた生活感が出てこない。）が、正月酒を酌みながらお互いの昔を語りあっている。その話がどういふ感情を持つものかは分らない。しかし一句から受ける印象は明るい。苦汁に満ちた昔のこともお互い笑いとばしている。その滑稽感は一とえに「初笑」という季語の働きによる。

この句を見ている私たちも、その話の仲間に入っているような気分させられる句だ。

〈初春や華の軀の道真直ぐ、〉〈完結の正念場を生く春隣〉の句も見事だ。「俳句における老い」に、一つのヒントを与えているような句と言える。